

報告

第14回 子どもの福祉用具展 —キッズフェスタ 2015—

東京都立墨東特別支援学校 木澤 健司

1. はじめに

第14回 子どもの福祉用具展キッズフェスタ 2015 (図1) が4月18日(土)、19日(日)の二日間、東京都大田区平和島にある東京モノレール「流通センター」駅隣接のTRC 東京流通センター第1展示場にて開催された。その模様を報告し、感想を添える。



図1 東京流通センター入口にて

2. 会場の様子

入口付近には八重桜が咲き、桜の下で楽しく過ごすバギーの子どもと家族が多く見られた。ポスターには、アンダー18(エイティーン)とあり、18歳以下の子どもを対象にした機器等の展示があり、7,500名ほどの来場者があった。

今年には58社が出展し、車いす(バギー含む)、姿勢保持具(カーシート、座位・立位・臥位保持装置、クッション・ベルト等)、移動用具(歩行器、杖、リフト等)、衣料品、入浴補助用具、スイッチ・コミュニケーションエイド、遊具・訓練具、食事関連、リラクゼーション関連、寝具関連、建築関連と多くの分野に渡っていた。

車いす、姿勢保持具、歩行器等は試乗を行う子どもが多く、各社の機器を乗り比べながら、業者から説明を受け、詳しい情報交換が繰り広げられた。その中でも話題になるのが成長対応である。各社とも座奥や足台等の調整はもちろんであるが、体幹変形等に対応する体幹パッドなどのモジュール型商品が用意されてきた。実際に会場で、将来の体幹変形等に関する相談は少ないものの、今後の身体の変化に対する各社の取り組みは信頼関係に結びつき、家族にとって安心を得る要素になりうる。

遊具を取り扱うブースでは、クッションを4つ程度にして座位や臥位など多くの姿勢で楽しめるデザインがあった。その遊具のデザインは、扱いやすく、「すぐに子どもが楽しめるか」がポイントになっていた。このように、ユーザーが簡単に変更でき、目的に応じて楽しさや快適性を得られることは、今後の福祉機器に求められる大切な視点かもしれない。

座位保持装置、車いす、歩行器を揃える業者が多くなりつつあるのも近年の特徴である。これは、「動くことがユーザーの豊かな活動を支える」ことに関連している。しかし、移動の先には上肢活動やコミュニケーションがある。運動発達の連続性での製品は揃ってきたが、残念ながらコミュニケーションまで含め、生活ベースの連続性を考慮された車いすやウォーカーのデザインは少ないように思える。

今後も、新しい発想や商品が開発され、子ども達の表情が更に明るくなるのが楽しみである。

東京都立墨東特別支援学校
〒135-0003 東京都江東区猿江 2-16-18